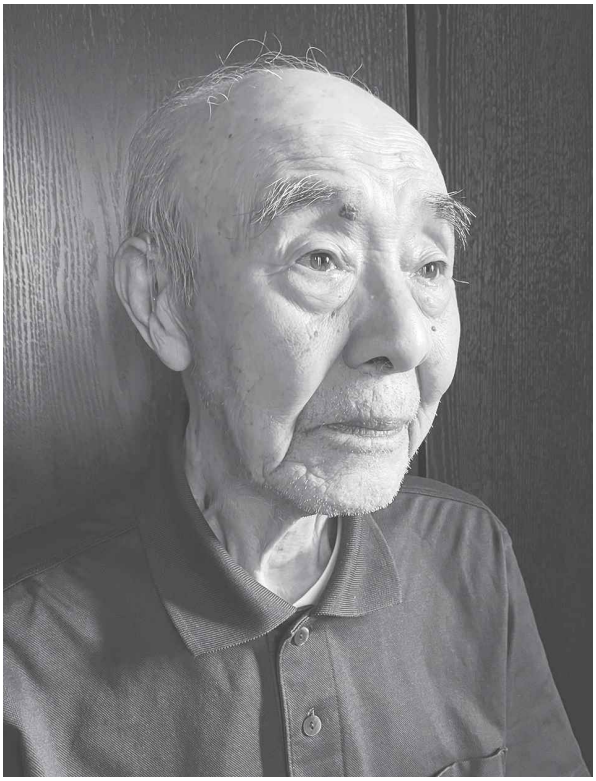
令和５年（第68回）秋田県文化功労者

（年齢順、敬称略）

美術・工芸	（美術文化の向上・指導）	伊藤康夫
技芸	（民俗芸能の普及・指導）	高橋キヌ子
学芸	（郷土の文化財の保護・研究）	森本彌吉
学芸	（日本近代文学の向上・普及）	北条常久
美術・工芸	（金属工芸の普及・発展）	千貝弘
技芸	（秋田民謡の普及・発展）	二代目浅野梅若
産業	（中小企業産業の振興）	藤澤正義



美術文化の向上・指導

伊藤康夫（いとうやすお）

（92歳）

住　所　　秋田市

永年、美術教師を務めながら、自己の感性・技術の向上を目指し、二科展、新制作協会展、文化庁現代美術選抜展などの中央の全国規模の公募展に出品を重ねてきた。秋田の美術文化活動に参加し続け、秋田県立近代美術館、秋田市立千秋美術館にも作品が複数収蔵されている。

退職後も、美術教師をしていた経歴から多くの卒業生たちから慕われ、県内の美術文化団体においてはその経験の豊富さと知識の豊かさから指導を求められている。県内の絵画教室などで指導にあたるほか、自身も未だ現役で出品を続け、後輩の育成にあたっている。

中央の美術団体からもその人柄が慕われ、高齢であるにも関わらず未だ出品を期待され、個展開催や展覧会開催の折は来場を乞う声も高い。秋田の美術分野における文化の向上と指導に広く貢献している。

民俗芸能の普及・指導

高橋　キヌ子（たかはし　きぬこ）

（本名　高橋　キヌ（たかはし　きぬ））

（91歳）

住　所　　仙北市

子供の頃から踊りが好きで、14歳頃には舞台で踊るようになる。昭和22年から24年まで、佐藤貞子師から直接手踊りの指導を受け、その後は藤井竹山師、浅野梅若師らと東北巡業や北海道巡業をして芸の修行に励んだ。やがて、ラジオやテレビ番組に出演し、県内芸能関係者の知遇を得た。

45歳頃のとき、「田沢湖民踊絹友会」を立ち上げ、テレビや舞台の仕事の合間に近隣の方々に踊りを教えたのをきっかけに、指導を始めた。全国を廻って覚えた踊りや貞子師から教わった手踊りを自分だけでなく沢山の人たちに伝えたいとの一心から、平成元年頃「高橋キヌ子社中」と名称を改め、地元の子供たちや県内外の踊り好きの方々に教え始めた。

これまで300人以上を指導するとともに、踊りの楽しさを伝えてきた。令和元年には指導する団体が日本郷土民謡協会全国大会で内閣総理大臣賞を受賞するなど、民謡王国秋田の礎を築いた功労者の一人である。

郷土の文化財の保護・研究

森本彌吉（もりもとやきち）

（87歳）

住　所　　美郷町

旧千畑村の歴史に関する冊子の出版に携わったことから、郷土史に興味を持ち、研究を始めた。深澤多市がしたためた村の歴史に関する貴重な歴史資料を発見し、有志で解読して製本し周知するなどの活動を展開した。

昭和55年、北国の歴史民俗考古研究誌「北方風土」（北方風土社）創刊に携わり、平成13年から令和５年まで同社事務局を務め、県内外の郷土史や文化財を広く周知し、県民の郷土愛醸成に寄与した。また、平成17年から令和５年まで美郷町文化財保護協会長、平成27年から令和５年まで秋田県文化財保護協会副会長を務め、県内の文化財保護と活用に尽力した。

坂本東嶽、深澤多市など郷土の先人の顕彰に努めており、昭和58年には深澤多市顕彰碑建立に携わったほか、現在は東嶽会会長として坂本東嶽邸の案内解説を行っており、令和４年に秋田県立博物館で開催された「深澤多市－郷土研究と真澄研究の偉業－」展にも協力するなど、功績の紹介に大きく貢献している。

日本近代文学の向上・普及

ほう　じょう　つね　ひさ
北　条　常　久

（84歳）

住　所　　秋田市

『種蒔く人』顕彰会長として、秋田県立図書館、あきた文学資料館の資料収集に貢献したほか、秋田県の若手研究者の育成に寄与した。

令和４年、『種蒔く人』創刊100周年を記念し『種蒔く人』顕彰会として編纂・出版した「『種蒔く人』の射程 ― 100年の時空を超えて ― 」（秋田魁新報社）は、秋田の研究者を含む幅広い執筆者を配し、高く評価されている。

秋田市立中央図書館明徳館では館長在任時に文学講座を開催し、秋田県生涯学習センターシニアコーディネーターに就任してからも、県民に向けた講座を多数開催してきた。さらに、受講生の声に応え、文学を学ぶ場として秋田文学愛好会を設立し、研究の成果を県民に還元している。県内の大学には文学部がなく、文学研究者も少ない中で、県民に文学の魅力を伝え、向上発展に貢献する実績を残している。

金属工芸の普及・発展

千貝（ちがい）　弘（ひろし）

（79歳）

住　所　　秋田市

昭和34年、就職を機に金属加工の道に入り、昭和44年頃から鍛金を始め杢目銅に出会う。昭和53年に千貝工芸金物を創立、のち法人化し、取締役会長を務める。

事業の傍ら、独自の地金製法技術の開発を進め、秋田伝統の杢目銅技法の復活・再現に注力し、平面から立体におよぶ多様な形状の器物に、多彩な杢目文様を自在に創り出す技法を確立した。

現在は「伝統技法の維持と現代生活文化の融合」を模索しながら制作活動を続けている。また、杢目銅の技術を一般に公開し、若い金工作家らに自らの工房を開放してアドバイスを積極的に行い、指導的立場で後進作家の育成に尽力している。

杢目銅の技法が一時途絶え、後継者難にも見舞われるなか、その技法を継承し、工芸品の制作活動と日本伝統工芸展などの全国展での発表により、秋田「杢目銅」の知名度を全国的なものに押し上げ、第一人者として貢献している。

秋田民謡の普及・発展

二代目（にだいめ）

浅野梅若（あさのうめわか）

（本名　浅野（あさの）　和子（かずこ））

（76歳）

住　所　　秋田市

小学生の頃、地元のお祭りや盆踊りなどで民謡を聞き感動したことが、自らの民謡を始めるきっかけとなる。昭和38年、浅野梅若師に内弟子に入り、民謡修行を始めた。

日本民謡協会全国大会及びNHKのど自慢全国大会等において、秋田民謡を歌い優勝するなど、秋田民謡及び秋田県の文化を全国に広めている。

平成20年、二代目浅野梅若を襲名して日本民謡梅若流梅若会宗家を継承した。初代浅野梅若の名跡を引き継ぎ、秋田民謡の伝統を継承するとともに、県内外の若手後継者育成に努め、これまで全国大会の優勝者をはじめ数多くの民謡歌手を生み出している。

日本民謡協会及び日本郷土民謡協会から民謡界の最高章である技能章を受章しており、秋田民謡及び秋田県文化の向上発展に対して、その貢献は極めて大きいものがある。

中小企業産業の振興

ふじ　さわ　まさ　よし
藤　澤　正　義

（72歳）

住　所　　秋田市

昭和51年に千代田興業株式会社に入社し、製造部において鉄骨造建築に係る知識を深めた。

平成21年、秋田県鐵構工業協同組合の理事長に就任し、組合員企業における生産管理技術者や建築鉄骨超音波検査技術者、建築士等の様々な資格の取得を推進し、鉄骨造建築の確かな品質確保のため、組合員企業の技術力の向上に尽力してきた。

平成26年には、自社が所属する協同組合の枠を超え、秋田県中小企業団体中央会の会長に就任し、県内の産業振興ならびに県内中小企業組合の指導育成に多大なる貢献をしてきた。現在に至るまで、優れたリーダーシップにより、中小企業・小規模事業者等が抱える課題の解決に向けた各種支援事業を実施し、業界の垣根を超えた懇談会を開催するなど各業界の生の声を関係機関に建議・陳情してきた。県内の産業振興に係るその功績は、非常に広範囲で大きいものがある。